

質屋と抵当

「金融経済学」と聞くと、つい難しそうで敬遠しがちですね。そもそも、ふだんの暮らしの中で、どんなふうに使っているのでしょうか？
今回は、便利に利用しているリサイクルショップ登場の背景にはエコブームだけでなく、経済学的な観点からも必然性があったというお話です。

質屋と抵当の話

この春、住んでいるマンションの大規模修繕工事のために、ベランダにあるものをすべて室内にかたづけなくてはならなくなった。我が家のベランダにはさまざまなものが置かれていたのが大騒動である。なかでも処置に困ったのが、大きなゴルフバッグだ。こいつは場所をとるだけではなく、その上にハトが好んでとまり糞ふんをしていくので見栄えも悪い。

ゴルフバッグを移動させると、ちょうどした気持のよい空間がベランダに出現した。ここにテーブルと椅子を出して、京都御所のほうを眺めつつ構想を練るならば、今の3倍は仕事ができそうな気配である。考えてみれば、この7年間ほどはゴルフをするどころかゴルフクラブにさわることもさえない。ゴルフをしに出

かける気力もまったく欠如している。かつてゴルフのために費やした、人には言えないくらいの金額が頭の中をよぎるものの、保管場所がないことには変わりはない。なので、思い切ってゴルフ道具を処分することにした。使いもしない物を置いて、本来あるべきだった快適な空間を失っていたのはいかにも無駄で、経済学でいえば機会費用の損失だったと、大いに反省したものである。

決心したものの、これは粗大ゴミであるから、おいそれと捨てるわけにもいかない。捨てるにもなかなか手間と金がかかるのである。このうえ金をかけるのも悔しいし、古びたゴルフ道具でも使いたいという人はいるかもしれないと考えて、リサイクルショップというものを持ち込んで引き取ってもらった。なかなか便利なのである。

リサイクルショップとは、廃棄物を加工して



京都大学 経済研究所 教授

梶井 厚志 かじい・あつし

1963年広島県生まれ。1986年一橋大学経済学部卒業。1991年ハーバード大学大学院卒業。Ph.D.in Economics。ペンシルバニア大学助教授、筑波大学社会工学系助教授、大阪大学社会経済研究所を経て、現在京都大学 経済研究所 教授
著書：『ミクロ経済学：戦略的アプローチ』（梶井厚志、松井彰彦共著）日本評論社、『戦略的思考の技術：ゲーム理論を实践する』『故事成語でわかる 経済学のキーワード』ともに中央公論新社など

再生品にリサイクルするのではなく、持ち込まれた物を預かるか買い取るかして、それを転売するという店をさし、昨今その数が増えている。その背景には、近年の不況による節約志向とエコブームだけではなく、より興味深い経済学的な必然性があるように思う。それは、質屋という業態がなぜ廃れてきたのかという理由を考えるとわかりやすい。

質屋と保管費用

客が持つてくる物を質草しよくさとして受け入れ、それに応じて金を短期間融通するという質屋の起源は、鎌倉時代中期にさかのぼるそう。室町時代、庶民文化が花開き、貨幣を用いて日常生活で必要な物を買求めるという生活形態が、庶民にまで本格的に浸透するにつれ、お金を手軽に調達しなければならぬような機会が増えた。そのためこのころ質屋も大いに発展したのであった。

貸金の額が小額であったとはいえ、信用のはっきりしない、見ず知らずの不特定多数の人たちに貸そうというのであれば、借金を踏み倒されるリスクの管理は重要な問題であった。質屋の場合、そのリスク管理方法は実に単純で、貸金が返済されない場合にはとっておいた質草を売却することにより、貸金の回収を図つたのである。

たのである。

質屋が貸金のカタとして質草を取っておくなどということは、このように改まって述べるまでもなく、当たり前のことであると感ずる読者も多からう。しかしながら、使いもしないゴルフバッグを後生大事に取っておけば経済学的損失が発生するのとまったく同じ理由で、質草を保管すればそれなりの損をするのである。事実、多量に持ち込まれる質草を保管管理するための倉庫が必要であったため、かつての質屋には大きな蔵が備わっていたそう。質屋を営むためには、融通する資金の元手が必要だっただけでなく、大きな土蔵まで作つて質草の管理をしなければならず、そのためにかからない費用がかつたのだ。

保管のためにかかる費用を質屋が負担するのか、それとも借り手が負担するのかという問題はあっても、最終的にはだれかが何らかの形で負担しなければならぬ。それゆえ、質草を取つて金を貸すというのは、経済学的に見て無駄のある非効率的なシステムなのである。

現代の金融における質草

しかし、金を融通してもらおうという必要性が、現代においてなくなつたわけではない。質

屋が果たしてきた役割は消えゆくのではなく、むしろ保管による無駄を省くべく分化して進化し、現在も力強く機能していると言つたほうがよい。

保管しなくても済むようにするもつとも単純な方法は、金を貸すのではなく、買い取つてしまうという方法である。これならば、金の返済の問題は発生しないから、質草の保管も当然不要になる。これが現代のリサイクルショッ



質屋と抵当

プが受け持つている部分であり、この業態が繁栄できる理由もここにある。私のゴルフバッグは無料で引き取られたのであるが、そのようなときでも、さもなくば自分が負担せざるを得なかった粗大ごみ処理費用に当たる値段で、買い取られたのだと理解すればよい。

次に単純な方法は、金を貸すときに質草を取らないというものだ。つまり、将来の返済能力を信用して貸してしまえば、質草の保管が不要になり無駄がない。しかし、このように金を貸すためには、借り手が将来に亘って安定した収入が保証されるような、職を持つていなければならぬ。そのため、この方式が普及するためには、サラリーマンと呼ばれる安定的な所得をもつ人々が大量に発生する必要があった。いわゆる消費者金融がこの役割の担い手である。

第三は、質草を貸し手が保管するのではなく、そのまま借り手に使わせておき、もし返せなければ取り上げるという仕組みである。区別のために、この場合は質草ではなく、抵当という言葉が使われる。抵当の考え方そのものは古く平安時代から存在した。農民は農地を抵当に入れて資金を借り入れ、それで種もみを買ってその農地において稲を栽培し、収穫された米で借金の返済をしたのである。現代の私たちが、購入する住宅を抵当にして住宅

ローンを組み、そこに住み続けて借金を返すのも、仕組みは同じである。

これならば、使わないものを保管することによる費用は完全になくなるから、経済効率性の観点からみると、抵当に対して貸金をするというのは非常に優れた方法であることがわかる。それゆえこの形式の貸借が、効率性を追求する現代的な金融において重要な地位を持つに至ったのである。

抵当のもつ危険性

しかし、この仕組みに問題がないわけではない。抵当になっていくものを借り手が使い続けるということは、事情を知らない第三者はそれが抵当であるとはわからないので不都合である。よって所有権が登記制度などで公に管理されるようなものでなければ、抵当として使いくいのである。そのため、必然的に不動産のように登記制度の確立した大掛かりなものが、抵当として使われざるを得なくなったのであるが、それは同時に抵当の大きな価値額変動が金融システムをまともに直撃するようになることを意味したのである。

※ ※ ※

さて、長期に亘った修繕工事が終了し、再びベランダが使用可能になった。新しい塗装がな

されたベランダは、なかなかよい雰囲気仕上がりになっている。かつてゴルフクラブが鎮座していた例の快適な空間はどのようになったかという、今そこには洒落たイスとテーブルではなく、大量の空き缶や空き瓶が置いてある。これらはリサイクルに出すために貯蔵されているのである。ゴルフバッグがあったころは、いったいどうしていたのだろう。理由はともあれ、私のささやかな夢はいまだに実現していない。



連載エッセイ 第3回

くらしの中の金融経済学